

INTERVIEW

増田信吾+大坪克亘展 「それは本当に必要か。」について

増田信吾 [40期]

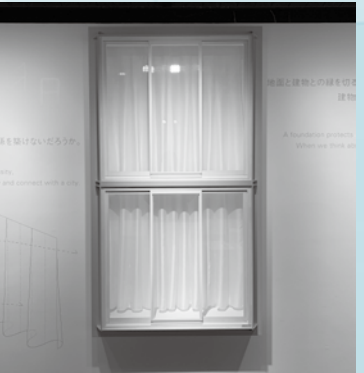
今回の展覧会について教えてください。

増田: 今回の展覧会は、一つ一つの仕事を完結させながらプレゼンテーションするというより、スケールや視点を変えてそれぞれを分解し、全部並べてみました。そこから感じる通底する考え方や思考回路で建築を捉えてもらうことで、いつも悩みながら発見していく設計の価値はどこにあるのか、そんなことを共有する場になったと思います。メイン会場の3階には、どうやってその場所の細かな事とか、構造的な事とかを含めて物が立ち上がっていくか、1/20から1/1のスケールで仕組み模型の展示としました。(Adaptation適応)壁面には常日頃思う疑問や矛盾をなぜなのという文章をのせ、壁際に沿って見ていくと、初見ではわかるようでわからないんだけど、展示を行ったり来たりすると理解が深まったり、見方が変わるようにしています。変わって4階はもっと俯瞰的でどんな場所にあるのか、それぞれでどのような態度で設計に向き合ったかを1/100の模型で統一して展示しています(Attitude姿勢)。今までやってきている仕事は大体1/100の模型で周辺に対してどういう存在なのかわかるような感覚があります。それぞれの解説は、今回こうこうこうだったから何をやった、みたいに簡素な説明をしています。

TOTOのショールームになっている1階と地下1階は、立ち現れて時間を過ごした今の写真をショールームに忍ばせながら、どこか寂しいショールームを盛り上げるように配置しています。(Appearance様相)まず、僕たちの設計は堀一枚からスタートしました。直接的に建物やその中を作り込んでいくというよりは、物と場の間を作る方がその両側に影響を与え、変え

られるなら、そこが重要なんじゃないかって事に気づいたんです。堀を展示していないのは、堀そのものを発注され、設計が受動的だったからです。今回は、ここをやった方がいいと発見し、そして提案したその後のプロジェクトだけを展示しています。躯体の窓は、一番初めは2階建てのRCの建物のインテリア設計の依頼でした。そこからクライアントと議論を続ける中で窓を設計したほうがいいということになりました。2014年に完成したのですが、ちょうどそこから約5年の間に実現してきたプロジェクトの展示になっています。

大坪と僕で物件の担当分けたりすることはせず、いつも二人でエスキスしています。二人でエスキスするとお互いが客観的になるので、ちょっと観念的になったり感情的になるとすぐ引き戻される。その逆もあります。大坪と僕は趣味がとても合うとかそういうコンビではないので、最終的に二人がこれは作る価値があるんじゃないか、ということになれば他の人もわかってくれ



街の家



リビングプール

るんじゃないかな、というすごく雑ですが重要な指標になっています。人間が状況を把握してこれからの状況をつくりあげるといふ「設計する」行為にすごい憧れがあって、元々持っている大きな疑問やそもそも違うんじゃないのかと疑問を投げかけて炙り出した発見を「設計」したいんです。普段模型はほとんど作りません。模型は施主にプレゼする時に1/20を一回作る程度。なので、エスキスはスケールに捉われないCGで行なっている。しかし、一体何に向かっていいのかわからなくなったその時は、模型で確認していくこともある。

増田さんが物件と呼ぶ多くの展示がありますが、いくつかプロジェクトの解説をしていただけますか。

[リビングプール]

建築主は、土屋ゼミから芸大の先端研に行った武蔵美の先輩なのですが、作品はミッドタウンのアートアワードの10年目の記念に選ばれて、ミッドタウンに収蔵され

ている美術家です。実家が、奥さん共々山形で、山形に住んでいる。彼はジョギングしている最中にこの家を見つけて、ここに住みたいと思って不動産屋を伝えてオーナーを探したそうです。初めの段階で彼は自分が住む家がどうやって作られるのか確認したいという動機があり、打設だけは職人にやってもらっていますが、残りのほとんどはDIYなんです。改修する家の床を開いたら、コンクリートの背の高い束が立ってて、ジャンカもあり、ボンボンになっていたので、一個づつ束を交換しながら新しい物と取り替えました。布基礎の内側の土だった所に、新たな生活の床になるコンクリートを打設した。金銭で仕上げ、ランデックスコートを塗るだけです。コンクリートの中に蓄熱暖房を仕込んで深夜電力で暖められているので、朝から夜までほんのり暖かい器のような基礎になりました。

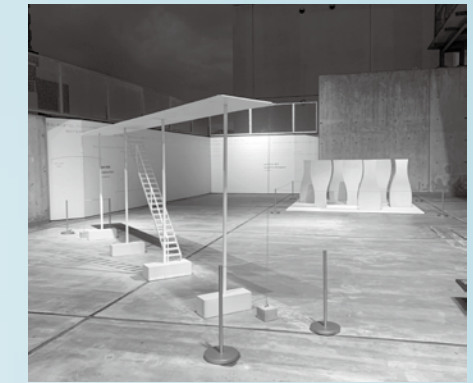
[街の家]

場所は都内で、バス通りでもある商店街沿いです。商店街は衰退気味でしたが、最近手の込んだ新しいお店が出店していて、活気が戻ってきています。ここはもともとプラモデル屋さんで、いきなりお店があって奥に行くと住居部分の居間があるというような感じでした。この家も武蔵美の建築学科を卒業されて今はインテリアの設計をやっている2つ上の先輩夫婦がオーナーです。大きいスケールで内装のスケッチを描いてくれるので、基本的に受け入れるような形で議論しながら生活を具体化していったのでよかったです。同時に思うのは僕らの仕事はなんなんだろうということです。これはすべての仕事で思うことです。

まず思ったのはこの敷地で新しく住宅を建てて住むことを考えると、光をどう工夫して下まで入れるかということが設計の軸になってしまい、あとは工夫していきながら収束させていくことになります。でもそれでは図面をかくことが仕事になってしまい設計がもつ拡がりのある仕事にならない。玄關までギリギリ1.5階分くらいの登り降りだったら毎日めんどくさくさそうだったので、だったら光を取り込んだり景色を望んだり、風を通したりに対して、家を持ち上げた方がまずは早いんじゃないかと思いました。

ないかと思いました。設備は全て1階が屋上に出して外壁には何もでっぱりが出ないようにしました。隣地との隙間は20cmとかしかないで、今後のことを考えると完全に乾式で設計を進めておくことが重要だと思いました。シールは切れますからね。そうすると配管やでっぱりが隙間に全くないため、光は下の方までスーッと入ってきたり、風の抜けも大分スッキリしていて不衛生な感じはしないですね。周りの建物にとっても、開かれていて心地よい1階の外壁と隙間になりました。ここで重要だったのは、普段後回しの外構設計を同時に、しかも同じくらいの設計密度でできるようなロジックを組み立てることでした。外構を作り込むことで特殊な施主じゃないとできない、っていうのがとてももどかしかったんです。でも考えてみれば街と直接つながっていて生活を柔軟に閉じたり開くことができるのは根本的には外構の設計だと思うんです。アイディアに提案性を出して一般的な価値観の先をちゃんと提示したい思いが僕たちは強いです。上に持ち上げた家ですが、場所柄から未来を想像すると、もしかしたら家の中のプランや用途は変わる可能性はゼロじゃない、ということになりシンプルでトネル状の家にしました。耐震性は家の短手の窓枠を鉄にして担保しています。あとは正面のカーテンは考えました。2階と3階を少しつなぎたいというリクエストがあったので道路側は400mmくらい吹き抜けを作って、そのカーテンは制作したんです。普通に発注しちゃうと布の量が多くなっちゃって、贅沢にしようとする3倍ひだとかになって勿体無いのでどうしようか悩みました。そこでオンデルデリンデという若手のテキスタイルを扱う事務所に相談して、ロールで売っている布を互い違いに切って長い台形をたくさん作り、台形の短手と長手を揃えてちょうど円錐の展開図のように縫い直したスカートのようなカーテンをつくりました。商店街に近い下端はドレープが大きくなり道を歩いている人と直接目が合うようなことはないようにし、上側は逆に布の量を少なくし空につながっていくようなカーテンで持ち上げられた家の構えをつくりました。家を持ち上げた事で、横のマニションの階段室なんかの開口部が開いてきたりもしました。

増田さんは、土屋先生が客員教授に迎えられた2004年に武蔵美に入学している。つなぎの小屋・庭先のランドマーク・始めの屋根などの小さな物件からGoodoffice 品川のような大型の物件に至るまで彼の視点のズレとそこから生まれてくる作品群には、アートと建築のインテグレートを目指す武蔵美建築学科の一つの方向の成果を感じさせる。(2020年2月16日 会場にて/聞き手:酒向昇 [21期])



野外会場風景



増田信吾 | Shingo Masuda
建築家

1982年生まれ。2007年武蔵野美術大学建築学科卒業。2007年から「増田信吾+大坪克亘」を共同で設立し設計をはじめ。主な受賞に、鹿島出版会SD Review2008、2009入選、AR Award 2009 commendation(UK)、JCDデザインアワード2011金賞、ar+d Awards for Emerging Architecture 2011準大賞(UK)ほか受賞歴、展覧会出展 多数。



エレベーター棟・東側外観

FEATURE

7・8号館EV棟+工房について

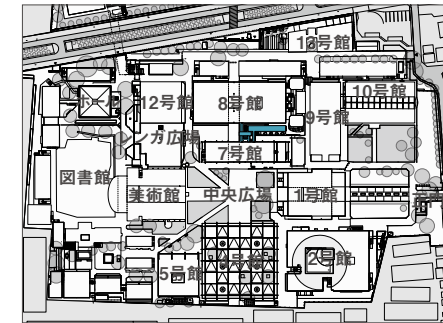
2020年9月、7号館と8号館の間にエレベーター棟+工房が完成し、両館でのエレベーターの使用や往来が可能になりました。デザイン監修及び基本設計に関わった布施茂教授に計画のお話を伺いました。

乙坂: まずは、計画の経緯について教えてください。

布施: キャンパス全体をバリアフリー化する計画が以前から進んでいました。検討のためのワーキングチームが発足し、私が座長を務めていました。委員であった板屋教授から、基本計画は布施教授から出してもらるか、という提案があり、布施スタジオの大学院で取り組むことになりました。最終的には基本設計とデザイン監修という立場で徐々に計画に関わるようになっていきました。2017年から取り組んでいましたが、2018年から本格的に関わりました。

石井: 7号館と8号館の間に配置するところから検討されたのでしょうか。

布施: 大学の施設管財チームで先に検討を進めていて、RC造を想定したおおよそのボリュームの設定はすでにありました。



鷹の台キャンパス配置図

石井: そこから何を重視して検討を進めたのでしょうか？

布施: DOCOMOMOにも指定されている7号館に対して、できるだけ距離を取りたい事、ボリュームを最小限にしたいとワーキングチームで話をしました。階段を外部化するなどの調整を行い、事前検討の半分のくらいのボリュームになっています。もう一つのポイントは石垣を保存するという事です。キャンパスの記憶として、石垣の存在が大きいのです。武蔵美に建築学科ができたときの教室が、ちょうど石垣のある7号館1階の半地下に面したところにありました。宮下先生に話を聞くと、そこで1期生はバーベキューしていたそうです。また、石垣の脇の煉瓦敷の動線を鷹の台ホールまで貫通させることも重要でした。そして、既存の重要度の高い部分を考慮して配置を検討すると、様々な条件に対して最も合理的な回答として、現在の配置に至りました。また、既存部分の改修も今回の計画に含まれています。ブリッジが繋がる部分については、開口を設け、構造補強を行い7号館のリブ意匠も再現しています。7号館の接続部にトイレの計画、8号館の接続部にはギャラリーを計画しました。

――事務所で関わるときとスタジオで関わるときとの違いは？

布施: 「基本設計+デザイン監修」の立場ですので設計の解像度が違います。デザインやディテールの考え方をスケッチで提示するというのが基本的なスタンスでした。ただ、教室の目の前で工事しているのになんか気がしてしまいますよね。(笑)[ここで大学院の大関さん塩澤さんに加わりお話を伺いました]基本設計については基本的には代々布施スタジオのM1が関わるようになっていて、サイン計画については大関さんが手がけられたそうです。

石井: どのようなきっかけでサイン計画や植栽計画にまで関わるようになったのですか？

大関: 先輩の引き継ぎで、まだ決まっていなかったところがサインと植栽の計画で、そこから、色決めや樹種の選定など、関わらせてもらいました。目の前で工事



エレベーター棟・西側外観

を行っているので、毎日のように見ることができました。記録写真は2000枚くらいあります。

石井: どのような体制で、どなたと打ち合わせをしたのでしょうか？

布施: 定例会議は私が出席し、所長や担当者と打ち合わせをし、現場打ち合わせや確認は大学院生も同席しました。基本図面を渡して、施工図のデータもらってそれに上書きしたりなど、現場や施設管財チームには協力的に対応してもらいました。大学院生達は恵まれていたと思います。建築設計実習としては、キャンパス内の建築を設計から現場監理まで体験できるいい機会でした。

石井: このプロジェクトに関わって、その後いかがでしたか？

大関: 学内をよく見るようになりました。どのように使われているかなども気になりますよね。

布施: キャンパス計画については本当によく意識するようになりました。共通のデザインコードがある訳で

はなく、ランドスケープについての課題も感じます。サイン計画もフォントや色も決まっているものはなくバラバラです。

大関: なので今回の色の決定についても、根拠がなかったことが難しさとも言えます。

――全体を振り返り

布施: キャンパスというのは、単体ではなく群で形成されています。その建物が全体の中でどのような位置付けなのか。まずは設計よりも計画が大事。既存のキャンパスが活きるようにするにはどうすればいいのか、第一工房で経験したキャンパス計画の考え方や繋がっていると思います。

聞き手: 乙坂(36期)、石井(37期)

対談企画

参加者：前田汐理、二又大瑚、西津尚紀、眞貝悠輝、
小澤祐二(40期)、石井大吾(37期)

日月会建築賞について

石井：本日はお集まりいただきありがとうございます。

日月会が主催している日月会建築賞は、通常の課題とは違い、応募者のみが参加する企画です。日月会建築賞について、参加するかどうかの判断はどのようにするのでしょうか。

二又：学校以外の評価、学校でもらえる意見とは違った意見をもらえるのは貴重な機会と思ったので。

西津：去年出した作品は、今まで作った中で一番気に入っていて、見られる人が限られていたの、もう少し多くの人に見てもらい、評価してもらい機会があればいいと思います。

石井：大学の課題で提出した作品を応募してもらうのですが、日月会建築賞用に編集はするのですか？

前田：友人は、今の作品は納得いかないのて手直してから出そうとしたが、結局提出できなかったようです。

小澤：みんな意外と学校の評価を気にしていますよね。学校で評価されなかったのをやめよう、とか。

石井：大学での講評との違いや発見などはありますか？

前田：私の模型を見た方で、軍艦島っぽいね、とか、インドにありそう、とか旅行される方なのか分かりませんが、なるほど、と思いました。

石井：その表現は教授陣がいる中では使いにくいですね(笑)。評価する側の環境も違うかもしれませんね。思ったことをすぐに口に出せるというか。講師陣も、教授やゲストに囲まれて発言するのは難しさがあそうですね。

眞貝：審査する方がベルトコンベア式にやってきますよね。その中で、初めの頃のプレゼンと最後の方のプレゼンでは違っていると思います。最後の方になると、雰囲気やわかってくるので、人に合わせていくことができます。訓練されている感じがします。



左：卒業生の展示の一部
右：学生の展示の一部

石井：大学では、1対1より、全体で説明する方が多いですか。

眞貝：そうですね。

石井：実務の世界では、両方の場面があって、1対1ではその場の空気の中で話をしていくこともありますし、どちらの機会もある方がよいのかもしれないと感じました。建築家は、大勢の方の前でのプレゼンは得意だけど、1対1は苦手、などいろんな方がいます。日月会建築賞は、何回もプレゼンをする機会がある訳ですが、どう思いましたか？

二又：最初に伝えようとしたプレゼンと、最後の方のプレゼンのスレなど、いろいろな方法の発見になるので、このやり方がいいと思いました。

前田：私もベルトコンベア式はいいと思います。あるいは前回パソコン使ってプレゼンしたのですが、それがわかりやすいという意見をいただいたので、A1シートや模型に加え、スライドも用意してプレゼンするというのはいいかと思いました。

石井：1次審査2次審査、2回に分かれることについてはどう思いますか？そこで評価が入れ替わったりもする訳ですが。

二又：1次審査は作品がすぐ目の前にあり、2次審査は自分の作品に対する真意を対話形式で進めていくので、分かれているのはいいと思いました。

眞貝：僕は模型がないことで、カタチを説明することが難しく、少し心残りもありました。

石井：2次審査は言葉の力を求められますよね。

小澤：今年は審査を完全オープンにしました。それについてはどう思いますか？なんでその作品に評価が集まるのか、そのプロセスを学生に知ってもらいたくてオープンにしている訳ですが、それがどう見えたのかなと。

前田：どうい話の流れで選んでいくのか、1から聞ける

コロナ禍における学生生活について

石井：現在のこのような状況については、感じたことなど書いて残しておいた方がよいという考えもあり、今の学生生活の様子、今後の進路のことなど、話をしていきたいと思います。こういう状況なので、難しいかもしれませんが、今後の進路や夏休みや春休みの過ごし方などはどうでしょうか？

前田：この状況では、休みが長かったとしても、海外には行けないので…。

石井：普段の課題も家の中に籠って取り組んでいる状況ですか？

西津：布施先生がスタジオを開けてくださっているの、結構行っています。

石井：西津さんは大学院に進むということですが、そこで取り組もうと思うことは何ですか？

西津：学部で4年間で建築を学んできて、建築の言葉は身につけたけど、建築の詳細を知れているかというと、4年間ではそうではなくて、大学院でそれを進めたい。布施先生のところでは実施設計ができるということ、建築の深いところを知れたらと思います。

もう一つは、絵を描いたり彫刻をつくったりしているのですけど、その分野については発表する機会がなかった、そのアートの世界を大学院で取り組めたらと思っています。

石井：とてもいい会場ですね。やはり展示は行いたいという気持はあるのでしょうか。

西津：言葉で足りないものを補ってくれるのが模型などだと思いますが、展示計画は伝えることを考えるよい機会です。

石井：日月会展は、卒業生と学生と一緒に展示をする、ということで、建築学科の先輩たちにとっても嬉しい機会だったのではないのでしょうか。ただ、武蔵美の卒業生たちがたくさん来ましたが、卒業生の作品と学生の作品のスケールが違い、ほとんどの皆さんが学生の作品の方をよく見ていました(笑)。皆さんは先輩方の作品を見てどう思いましたか？

前田：プレゼンボードや模型のクオリティが高いと思いました。

西津：僕も同じです。zoomでは1方向でしか会話ができて、発想や出てくるものの幅が小さくなるように思います。

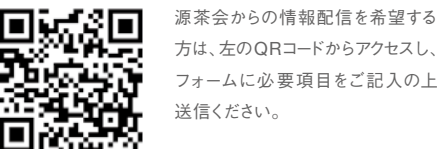
TOPICS

源ゼミOBOGが集う勉強会および源先生ご退任のお知らせ

尾内志帆[39期]



上：還暦祝いの花束を手にする源先生(撮影=2010年3月13日)
下：勉強会の様子(会場=D-LAND、撮影=2019年1月26日)



源茶会からの情報配信を希望する方は、左のQRコードからアクセスし、フォームに必要項目をご記入の上送信ください。

源茶会／源ゼミOBOG会
発起人 浜田幸康・竹内誠(18期)
事務局 酒井博基(33期)、尾内志帆(39期)
連絡先 genchakai@gmail.com
(源愛日児先生 武蔵野美術大学教授退任記念「最終講義」が2021年10月23日[土]17-19時オンライン形式で開催されました。)

源茶会。そう名付けられた、源愛日児先生のゼミ生(1～3期)が中心になって進める勉強会があります。コトの発端は、2009年度末に開いた源愛日児先生の還暦祝いを目的とした、源ゼミの1～3期生合同の同窓会。そのなかで、再度より世代を広げて同窓会を開けたらと話が発展していきました。

「折角だから、何を考えたんな仕事、活動、研究をしているか講演者をたてて、話題を深め、掘げたら、同窓会は刺激にも、励ましにも、楽しみにもなるだろうと思います」そんな源先生からの後押しもあり、ただの同窓会ではなく有意義な学びの場として「源茶会」はスタートしました。

2010年から計7回の勉強会を開催。毎回15～20名のOBOGが集まり、過去には、加藤雅久さん(20期)、竹内誠さん(18期)、小池利佳さん(29期)、笹口数さん(20期)、酒井博基さん(33期)、藤田一輝さん(49期)、そして源先生にも話題提供をしていただきました。多世代・多分野で活躍する卒業生の活動報告から、各々のフィールドに新たなアイデアや視点を持ち帰るきっかけとなっています。

第7回の勉強会に参加したという47期の宗像秀展さんは、「話を聞いているだけでも勉強になります。源先生や参加者の対話によって個々の活動が読み解かれていくことでさらに理解が深まります」と話します。有意義な会の様子や参加する楽しさが伝わってきますね。

今後も勉強会でもあり交流会でもある「源茶会」を定期的に開催していく予定です。また、今年度末には源先生がご退任となります。昨今深刻化している新型コロナウイルス感染拡大の影響で、退任式や最終講義の予定は未定となっていますが、OBOGとして源先生への感謝の気持ちを表す機会や、記録に残る活動を考えています。この機会に源ゼミ生の交流も深めていけたら幸いです。

今後の源茶会の取り組み、源先生のご退任に関する企画について、ご関心があり情報配信を希望する方は、左記のQRコードからフォームへの連絡先入力をお願いいたします。

鷹の台に集まる現役学生や全国に散らばる卒業生のみなさん

INFORMATION

『日月会』学修支援プログラム 学生支援募金へのご支援のお願い

新型コロナウイルス感染拡大により、厳しい状況が続いております。この状況に直面しているすべての皆様に心からお見舞い申し上げます。建築学科同窓会日月会では、新型コロナウイルス感染拡大防止対策の結果として、現役学生の皆さんが、通常の学生生活の変更を余儀なくされ、同時に学生を支えるご家族に置かれても様々な障害が生じていることを懸念し、日月会執行部会で協議を重ね、学生生活を支援する緊急学修支援プログラムを計画し、実施いたしました。

【概要】
・学修給付券：一人あたり、世界堂商品券10,000円(1,000円券×10枚)
・給付対象：最大357人(建築学科357人/学部生328人・大学院生29人)
武蔵野美術大学建築学科学部及び大学院に所属する学修意欲を持つ在学生。日月会の趣旨や活動に賛同し、卒業後は正会員として、日月会を支え、同会員や現役学生と交流を図る意思のある方。

50名の学部生大学院生より、熱意ある小論文と共に申し込みを受け、2020年11月9日に給付を実施いたしました。継続的な活動を支えていただいた、会員の皆様からお預かりしている運営資金により、このような支援を実施することができました。今後も、現役学生の学びを支える

ご挨拶

小津誠一 Kozu Seichi

日月会会長 [23期]

新型コロナウイルス感染症の影響で、日月会の活動にも様々な影響がありました。まずは、本紙フォルマフォロ20号の発行が一年以上遅れたことをお詫び申し上げます。そして、ムサ美においても様々な制限が余儀なくされ、入学式や卒業式、芸祭など学生とのリアルな交流の機会も失われました。一方で、時代を推し進めるように変革が早まったこともありますが、日月会においても、執行部会を毎月オンラインで続けたことで、現役学生も交えた日月会建築賞や夜塾、総会のオンライン開催が実現しました。金沢市を拠点とする僕が会長に就任した時点で、全国型の同窓会を目指そうと考えましたが、執行部会を全国各地に居ながらにして持続し、大阪からも執行部会メンバーを迎えるなど、今後ますます新しい取り組みが始められそうです。思わぬカタチでトランスローカルな日月会の可能性が見えてきたと言えるでしょう。

また、本紙フォルマフォロも次号から紙媒体からデジタル配信へと姿を変えていくことといった検討課題が見えてきましたし、鷹の台に集まる現役学生や全国に散らばる卒業生のみなさん

のために、支援策を講じていく所存です。

しかしながら、コロナ禍の状況を考慮し、昨年は新規入会費の徴収を見送っており、今後の支援活動のためにも財政的な策を考えていく必要があります。多くの方々から、学修支援プログラムについて、賛同のお言葉を頂戴いたしました。この度は皆様のお気持ちに添えるべく、募金をお願いする次第でございます。

どうか日月会活動にご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

ために、支援策を講じていく所存です。しかしながら、コロナ禍の状況を考慮し、昨年は新規入会費の徴収を見送っており、今後の支援活動のためにも財政的な策を考えていく必要があります。多くの方々から、学修支援プログラムについて、賛同のお言葉を頂戴いたしました。この度は皆様のお気持ちに添えるべく、募金をお願いする次第でございます。どうか日月会活動にご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1.募金の名称：日月会 学生支援募金
2.募金の目的及び用途：コロナ禍以降においても、建築学科の学部生、大学院生の学びを支えることを目的し、運用いたします
3.募集の対象：趣旨に賛同いただける方
4.募集の期間：2021年9月30日(延長の可能性もあります)
5.募集の金額：一口1万円、3万円、5万円、10万円のいずれか
6.申込及び納入の方法：日月会ホームページの学生支援募金申込ページより、フォームに必要事項をご記入の上、お申し込みください。日月会からの返信メール内に記載された納入方法(クレジットカード決済or銀行振込)に従って、募金の納入をお願い致します。

ご挨拶

小津誠一 Kozu Seichi

日月会会長 [23期]

とのオンラインで交流にも取り組んでいきたいと考えています。本来であれば、今年の春で任期満了により、僕を含む執行部メンバーの多くが交代の時期でしたが、昨年度の総会での決定により、一年任期延長とさせて頂くこととなりました。カタストロフィが起きる度に語られる「build back better」という合言葉がありますが、よりクリエイティブで、より良い日月会(の再)構築を目指して、残りの任期を務めたいと思います。皆様には引き続き、日月会へのご支援を賜りますよう、そして、是非全国各地から日月会へ参加いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、昨年9月に竹山実先生がご逝去されました。本号の表紙は、解体が決定してしまった竹山先生設計による晴海フェリーターミナル(1991年竣工)です。建築学科設立より約40年に渡り武蔵美にて教鞭を執られ、退任後も竹山実賞(現・長尾重武賞)を設立されるなど、ムサ美建築に多大なご功績を残されました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。



[学生支援募金申込ページ]

https://nichigetsukai.com/contact/donation-support/

[FEATURE内覧会情報]

「U50の現在の活動」展覧会

期間：2019年8月25日(日)～9月1日(日)

会場：吉祥寺gallery shell 102

後援：武蔵野美術大学校友会

出展者：石井健(26期)、大山啓(35期)、

鈴木竜太(36期)、乙坂孝(36期)、石井大

吾(37期)、小澤祐二(40期)、小田権史

(46期)

前田汐理：第21回日月回建築賞 太陽賞

二又大瑚：第21回日月回建築賞 満月賞

西津尚紀：第21回日月回建築賞 新月賞

[表紙写真]

「晴海客船ターミナル」

photo：古館克明

[編集後記]

フォルマフォロ20号の発行が大幅に遅れてしまいました。コロナ前の記事もありますが、今回も皆さまにお届けできて幸いです。複雑に変化する社会情勢の中、本誌は様々な方のご協力の上で発行することができました。ありがとうございます。[KO]

デザイン：小田権史

印刷：株式会社山田写真製版所

発行：武蔵野美術大学建築学科

同窓会・日月会

http://www.nichigetsukai.com

東京都小平市小川町1-736

武蔵野美術大学建築学科研究室内

Forma-Foro

20 フォルマ・フォロ | 武蔵野美術大学建築学科・日月会
MAR.1.2020 | VOL.20

